平成 27 年

12 月の普及活動状況

ダイジェスト版

～県下 10 農林事務所農業普及課と農業経営課（農業革新支援センター）の取組～

岐阜県農政部農業経営課

平成２７年１２月の普及活動状況ダイジェスト版

活力ある新産地づくり

中濃農林■ゆず　「かみのほゆず」大豊作！

11 月上旬から始まった「かみのほゆず」の出荷が 12 月中旬で終了した。今年は約 50ｔ（昨年実績 20ｔ）が、かみのほゆず㈱に出荷され、過去最高の大豊作となった。出荷されたゆずの多くは、果汁やゆず商品に加工され、一部はゆず湯用に生果で販売された。

農業普及課では、昨年度から関市上之保地域のゆずを新産地づくり農産物に位置づけ、反射シートによる害虫対策や草生栽培による省力化の実証、農家台帳の整備と活用並びに加工品開発等の支援を行っている。

【出荷されたゆず】

平成28年2月には、これまでの活動実績を取りまとめ、かみのほゆず㈱、関市東商工会、ＪＡめぐみの、関市農務課、農業普及課で構成される「かみのほゆず産地戦略会議」において情報共有を行い、来年度以降の取り組みについて協議する予定である。

恵那農林■ブロッコリー　栽培反省会を開催

ＪＡひがしみのブロッコリー研究会では、12 月 18 日に、恵那総合庁舎において栽培反省会を開催し、生産者をはじめ、中津川市、恵那市、ＪＡ、市場関係者が出席した。

農業普及課からは、本年度の栽培実績及び次年度の取り組みのポイント、ＪＡ・市場関係者から出荷実績・商品評価等を説明した後、各生産者が反省点、今後の改善点等について紹介した。

今年度は天候等の厳しい栽培環境であったが、出席者は栽培技術の向上が安定生産の基本であることを再認識し、意識向上が図られた。

今後の取り組みについての意見交換では、市場出荷を基本とした産地化をめざしつつ、規格外品は地元農産物直売所や学校給食で有効活用を図る等、地産地消活動の推進への意識統一も図られた。

農業普及課では、次年度も新産地づくり地域活性化推進事業を活用し、恵那地域における新品種や新技術の適応性の検証、生産現場への普及を通じて、ブロッコリー産地育成に向けて支援を継続する。

【検討会の様子】

下呂農林■スイートコーン　第９回研究会を開催・愛称が決まる

12月16日、下呂市スイートコーン研究会は下呂総合庁舎にて研修会を開催し、生産者計22名が参加した。

昨年、良質なコーンを多く生産した農家からの事例発表や、加工品づくりについての専門家による講演が行われ、農業普及課からは28年産の栽培準備等の説明を行った。

このほか、ブランド化に向け、愛称を「南飛騨コーン」とすることが決定され、来年７月の収穫開始と同時にイベント等で広くＰＲしていくこととなった。

【名人から栽培のコツを披露】

売れる農畜産物づくり

岐阜農林■祝だいこん　関西のお正月商材として出荷

12月17日に、祝だいこんの目揃会が開催された。今年は、は種時期が例年より早く、気温の高い期間が長くなったことなどから、例年より太く、長い祝だいこんになっている。

消費者や市場のニーズは、従来の３本束出荷から２本束、バラなどの少量購入に加え、太くてボ

リュームのあるものに変化してきており、市場からの要望量は昨年をやや下回る約24万束（３本換算）となった。

これを踏まえ、今年は昨年に比べ、太く、長い規格に変更となった。

農業普及課からは、今年の気象経過、生育調査の結果概要を情報提供し、ＧＡＰ点検項目（選別基準・出荷規格の遵守など）について指導した。12月21日～28日までの期間限定で大阪市場に出荷され、関西のお正月には欠かせないお雑煮の具材として使用される。

【目揃会での指導の様子】

農業経営課■ポットマム　岐阜花き流通センターＧマム部会現地研修会を開催

岐阜花き流通センター農協Ｇマム部会では、生産者６名がキク種苗会社と連携して、ポットマムの新しいブランドづくりに取り組んでいる。

12 月 3 日には現地研修会を開催し、年末・正月向けの試作品種の開花状況確認を行った。参加者は、各試作品の花色や栽培特性について熱心に意見交換を行っていた。

各農業普及課と農業経営課では、生産者と連携した花型、開花時期、矮化剤反応、耐病性等の品種特性を把握や、栽培管理指導を行なうなど、引き続きブランドづくりの支援を行う。

【現地研修会の風景】

農業経営課■飛騨牛　子牛の育成に関する女性部研修会を開催

12 月 4 日、高山市和牛改良組合高山支部（支部長：二反田康浩）は子牛の育成に関する女性部研修会を開催し、和牛繁殖農家の女性、関係団体職員等約 20 名が参加した。

研修会では飛騨家畜保健衛生所の獣医師が分娩前後の牛の管理について講演を行った後、農業経営課の農業革新支援専門員が子牛用飼料に含まれる飼料添加物の特徴や寄生虫対策等に関する講演を行った。12 月から県内の子牛市場で一部の飼料添加物の使用状況が表示されるようになり子牛価格への影響が懸念されていることから、飼料添加物の特徴や、肥育農家が飼いやすい健康な子牛の生産方法等について熱心な質疑応答が行われた。

同組合では飛騨牛の品質向上をめざして今後も同様の研修会を開催する計画である。

【女性部研修会の様子】

多様な担い手育成・確保

西濃農林■新規就農者　農業高校生による管内農業の現地巡回学習会を開催

12 月 4 日に、農業高校生の地域農業への興味・関心を高め、将来の地域農業の担い手確保・育成を目的に、県立大垣養老高等学校の学生を対象とした現地巡回学習会を開催した。

生産科学科を中心とする希望者 21 名が、管内の各品目（花き、土地利用型、肉用牛、蔬菜及び６次産業化）の先進経営体を視察した。経営者から経営内容の説明等を受け、施設内を見学。質疑応答もあり、先進の企業的農業経営の実態を肌で感じていた。

この学習会をきっかけとして視察先経営体へ就農した卒業生もおり、参加学生の、就農に向けた今後の意識改革に期待したい。

【大規模施設（牛舎）を見学】

揖斐農林■就農支援　第三者継承による経営体（冬春トマト）の支援

池田町でトマトの養液栽培を行っている生産者が、高齢のため第三者への移譲を望まれていた。それは、自身の子がトマト経営を継承する意思がないためで、相談を受けた農業普及課は、平成24年より継承者となるような人材を探しマッチングを行ってきた。

今回の継承希望者は地元池田町の方で、平成27年4月に初回相談を行い、その後農畜産公社をはじめ町、ＪＡなど関係機関とともに事前研修等を支援し、継承合意に向けて話し合いを続けてきた。

【合意書を前に固い握手】

12月17日、池田町役場において多数の立会人、報道機関をまえに合意書調印式を行うに至った。移譲者は自身の経営が生き証しとして残ることに感慨深い様子で、継承者は将来を見据えた抱負を語った。

農業普及課では、継承者が研修を無事終え、就農、自立していくまでの今後を、移譲者とともに支援していきたい。

郡上農林■新規就農　郡上市農業振興大会で就農支援の取組みを紹介

12月5日、郡上市白鳥町白鳥文化ホールにおいて、郡上市農業振興大会が開催された。

この大会の農業振興事例発表において、農業普及課から「郡上地域における新規就農支援」として、就農支援協議会やトマト研修施設の設置などの関係機関一丸となって新規就農への支援をしている事例を報告した。また、次年度開催の農業担い手サミットの紹介と協力要請を行った。

【発表風景】

その他、第1回郡上おいしい米コンテストの表彰式やこの1年間で表彰された農業者の披露・紹介などが行われた。

可茂農林■指導農業士　加茂農林高校の生徒と交流会を開催

可茂地区指導農業士会は、地元の農林高校生に就農について考えてもらうため、12月4日に第1回井戸畑会議「農業を学ぶ君たちへ！」を開催した。これは、お茶を飲みながら井戸端のようにくつろいだ雰囲気のなかで意見交換を重ねてもらおうとの思いから命名したもので、指導農業士会としても初めての試みである。対象は生産科学科に在籍する1･2年生の希望者23名である。

【井戸畑会議を終えて】

生徒たちは事前に指導農業士のプロフィールを確認したうえで希望するテーブルに着席。指導農業士1-2名を5-6名の生徒が囲み、1ラウンド40分の2ラウンド制で意見交換を行った。農林高校生といっても普段から農業者と接する機会がない非農家出身者が多く、農業で生計を立てるとはどういうことなのか、目を輝かせながら話に聞き入る姿が印象的であった。

話し合いの後は、参加者全員がこの日心に残った一言を付箋に書いて名札に張り、車座になって発表しあった。最後に佐伯会長から、回り道をしてもいいから、いつかは農業を始めたいという気持ちを失わず、学業に励んでほしいとの言葉があった。

交流会終了後、さっそく加茂農林高校から生産科学科2年生全員を対象とした出前授業の要請があり、1月19日に開催を決定するなど、改めて反響の大きさがうかがえるものとなった。

農業普及課では、内容を再検討して来年以降も継続できるよう、指導農業士会の支援を行う。

東濃農林■集落営農　土岐市で初となる農事組合法人の設立総会を開催

12月23日、土岐市曽木公民館において「農事組合法人曽良の里」の設立総会が開催された。この

新法人は土岐市曽木町の一部をエリアとし、組合員50名の集落ぐるみ型の集落営農組織で、この地域は、平成26年度より集落営農システム確立サポート事業の重点指導地区に選定され、組織

設立について検討してきた。農業普及課では、事業取り組み前の平成25年度に集落アンケート調査を提案し、曽木町の農業の現状把握、分析、問題提起などを行い、組織設立について支援してきたところである。

当面は農地中間管理事業を活用して集積した水田 8ha で水稲経営を行う予定で、早期に法人の経営確立が図れるよう、関係機関が一体となって支援を継続する。

自己完結型農業を主体とする土岐市では初めてとなる農事組合法人の設立となったため、この動きが他の地区の集落営農の推進や法人化に波及することを期待しつつ、今後の普及活動を展開していく予定である。

【設立総会の様子】

飛騨農林■集落営農　**Yes! We can.（そやさ！できるさ）　集“楽”営農の実現に向けて**

飛騨農林事務所は、飛騨市と連携して集落営農組織の代表者・構成員および関係機関の職員等を対象に12月2日、第1回集落営農塾を開催した。

県集落営農アドバイザーの楠本氏を招き、集落営農リーダーの重要性や事例紹介等に関する講義を聴いた後、集落ビジョン作成のためのワークショップを行った。

ワークショップでは、ブレーンストーミング手法を用いて、集落の課題、強み（お宝）、夢・課題解決策（将来できたらいいと思うこと）を付箋に書き出し、取りまとめて意見の確認を行った。

参加者からは、「集落の現状、課題、住民の意向を把握するのに効果的な方法であり、持ち帰ってやってみたい」などの感想が聞かれ、集落営農の推進にはずみがつく塾になった。

農業普及課は、塾の開催を支援した他、ワークショップの現地での実施及び集落営農の推進をサポートしていく。

【なるほど！ワークショップ体験】